2021（令和 3）年度前期授業改善アンケート集計結果

2021 年 12 月 22 日

教務委員　京相 雅樹

１．データ概要

表１　概要

集計科目数：	23 科目（R2:18, R1:21, H30:21, H29:23, H28:17, H27:17, H26:22, H25:19, H24:15, H23:16）
平均回収率：	49.5%（登録者数に占める割合）（R2:54.3%, R1: 80.1%, H30:85.0%, H29:90.8%, H28:88.0%）

２．各項目の評価点

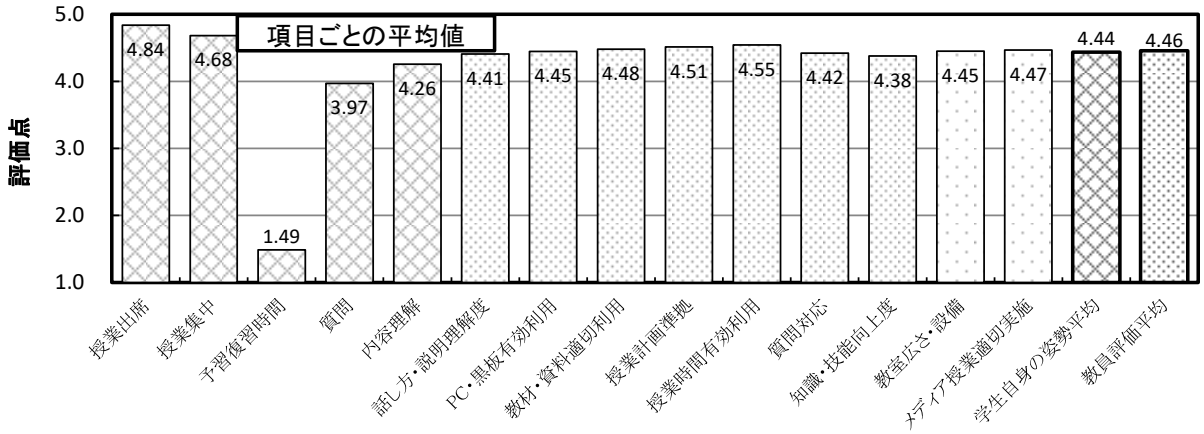

図１　平均評価点

表２　アンケート項目

●学生として		●授業について	
①	遅刻や欠席をせずに出席しましたか	⑥	話し方や説明は分かりやすかったですか
②	居眠りや私語をせず授業に集中しましたか	⑦	コンピュータ、黒板などの使い方は適切でしたか
③	授業1回に対し宿題を含めた予復習を何時間しましたか（右の数字は時間）	⑧	教材（テキスト、プリントなど）の使い方は適切でしたか
		⑨	授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されましたか
④	わからないときに質問をしましたか	⑩	授業時間を有効に使っていましたか
⑤	授業の内容は十分に理解できましたか	⑪	質問に適切に対応してくれましたか
		⑫	総合的にみてこの授業で力は付きましたか
		●施設について	
		⑬	教室の広さや設備は適切でしたか（対面型で受講した場合のみ）
		⑭	メディア授業は適切に実施されましたか（遠隔受講した場合のみ）

※ 平成 29 年度から「授業評価アンケート」となり，質問項目が変更された

３．対応するアンケート項目の年次推移

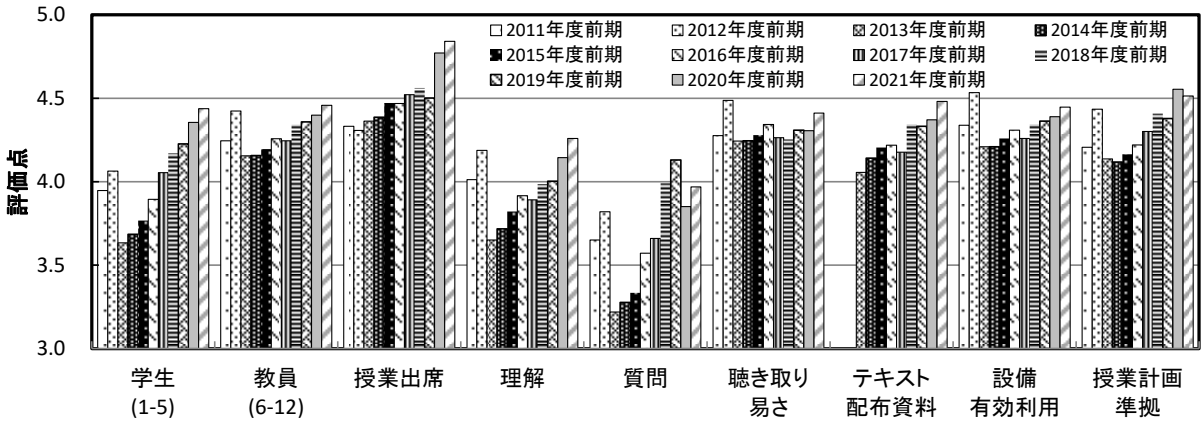

図２　対応する項目の年次推移

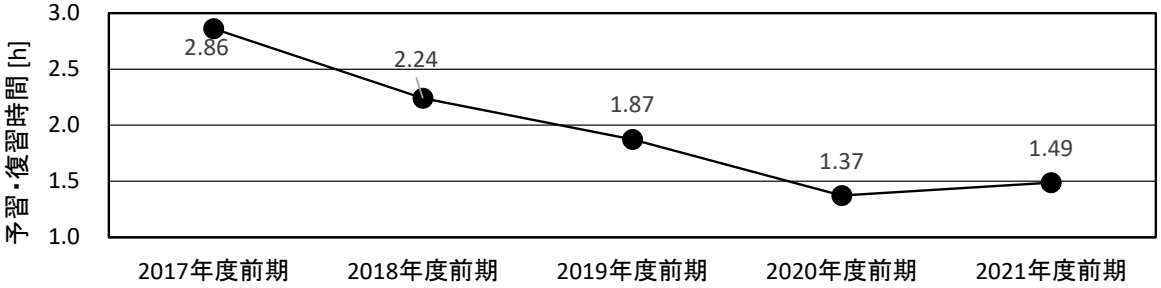

図３　予習・復習時間の年次推移

４．科目ごとの詳細データ

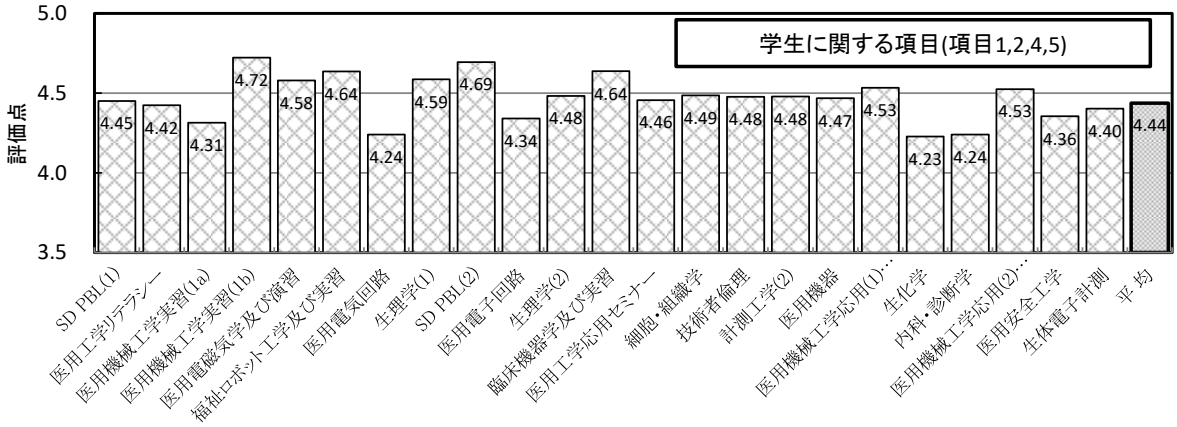

図４　学生に関する項目の平均値(科目ごと)

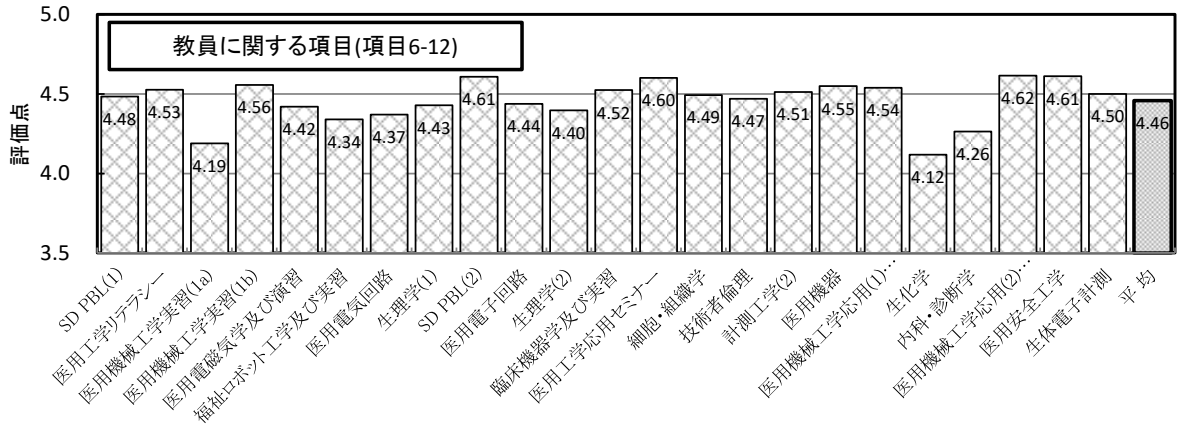

図５　教員に関する項目の平均値(科目ごと)

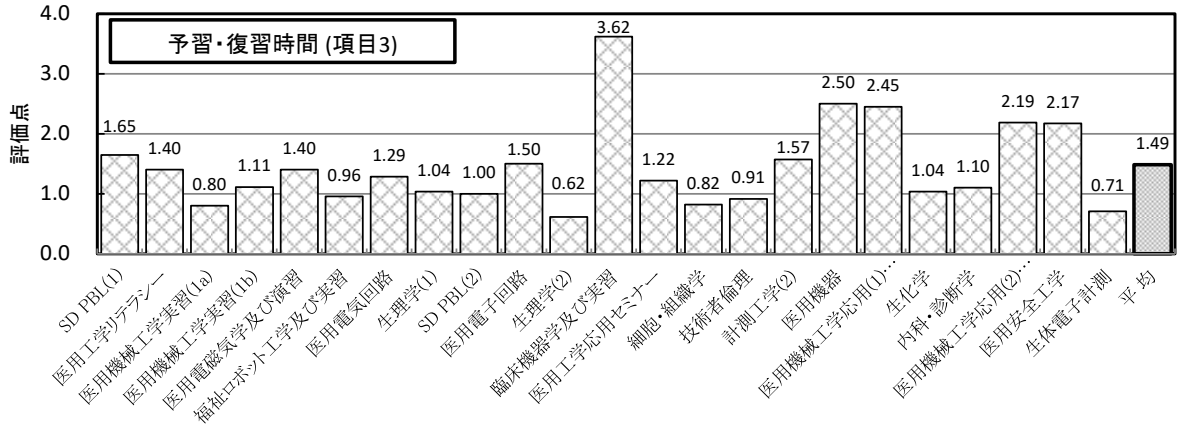

図６　予習・復習時間(科目ごと)

５．データについての考察

5.1　平均評価点について

図１に示された項目ごとの平均評価点について考察する。項目番号とアンケート項目の対応は表２の通りである。

(1) 項目 1,2：授業への出席と居眠りや私語

両項目ともに，非常に高い値となっている。項目１については，遠隔授業がほとんどであり，通学の必要がなかったことが大きいと考えられる。また，授業中友人とすぐに話ができる環境ではなかったため，項目 2 も高い値になったと考えられる。

(2) 項目３：予習・復習

昨年度まで，低下傾向であったが，今年度はやや持ち直す形となっている。ただし１科目平均４時間にはまだ遠い状況である。シラバスに授業回ごとの予習復習事項を記載するようになったことから，その存在を学生に認識させることと，内容を毎年改善してゆくことで予習・復習時間は改善が見込めるのではないかと思われる。

(3) 項目４：質問

予習・復習時間の項目以外では最低値となっている。遠隔授業で環境が変わり，質問しにくい状況になっていた可能性がある。しかしながら，昨年度との比較では，多少持ち直している。これは，リモート授業環境に教員も学生も適応してきたためであると考えられる。

(4) 項目 6～12：教員に関する項目

平均で 4.46 となっており，平均的には高い水準にある。科目ごとのばらつきがあるので，平均を下回っている科目について改善を加えることにより，さらに向上することが期待される。

5.2　データの推移について

図２より，ほとんどの科目で年々向上していることが分かる。「聞き取りやすさ」の項目はここ数年変化がなく，どのような改善が考えられるのか，検討する必要がある。「授業への出席」については昨年度まで飽和状態となっていたが，昨年度に続き高い値を示している。これは遠隔授業の実施により自宅で受講できるようになったことが関係していると考えられる。一方で，2020 年度に一旦低下した「質問したか」の数値が持ち直している。昨年度は，受講環境の変化により質問がしにくい状況になっていたと考えられるが，今年度は環境に適応してやや質問がしやすい状況になったのではないかと考えられる。

図３より，統計を取り始めて依頼低下を続けていた予習・復習の時間は今年度わずかに持ち直していることが分かる。しかしながら，相変わらずその水準は低いままであるので，シラバスに記載する予習・復習内容をより具体的なものとするとともに，学生のその内容をしっかり確認するように周知することで改善できるのではないかと考えられる。

5.3　科目ごとの評価について

図４，５より，数値自体は高い値を示しているが，科目ごとに評価点にばらつきがあることが分かる。各教員は，別表の詳細データをもとに，どの項目をてこ入れすべきかについて考察することにより，次年度の実施に向けて改良を効率的に行うことが可能となる。